

私の父と祖父は仲が悪かった。理由は祖父の酒好きで、酒を飲むと我を忘れて起こるため父と口論が絶えなかった。しかし、祖父も遂に過剰飲酒が原因で体調を崩して入院した。レントゲン検査の結果、肝臓が真っ白で医師から余命半年と告げられた。祖父との別れを覚悟した父は朝昼晩と病院へ通い、三度の食事の時間は病院食を自らの手で祖父に食べさせた。どんな天候でも何かに取り憑かれたように必死に自転車をこいで病院へ足を運んだ。そのうち父は疲労とストレスが原因で自律神経失調症になり、自ら治療のために通院しながら祖父の食事の為に病院へ通った。周囲の人々は父のそんな姿を見て、何故そこまでするかと陰で噂をしていた。かつて私は父から祖父についての話を聞いたことがあった。バスの運転手をしていた祖父のバスに乗ることが幼い父にとって楽しみであったらしい。日中戦争が始まると祖父は満州へ出征し、父は母親と家を守ってきたが、祖父は旧ソ連の捕虜となり、父は十年近くは父親不在の寂しい青年期を過ごしたらしい。祖父は抑留生活の後、帰国して元のバス会社に戻って勤務した。しかし、他の営業所への相次ぐ転勤やバス路線の拡大で多忙を極め、またもや父と祖父は向き合う時間が無くなったらしい。そして祖父は定年となったが、元来好きな酒におぼれてしまい、入院したが死の宣告を受けてしまった。父の献身的な病院通いのおかげが気が付くと祖父は半年の命が一年以上延びていた。酒を飲まない祖父は優しい老人になっていた。父の行為に対して感謝の言葉を述べていた。しかし祖父はやがて木が枯れるように静かに息を引き取った。祖父の入院によって父は、ようやく親子の時間を作れたのかもしれない。体調を崩してまで貫いた父の看病にはどんな想いがあったのか？父に聞いてみても本当の気持ちを語ろうとはしない。父の真剣な親孝行の姿は私にもはつきりと刻まれた。父の心ころは父以外誰も知らない。